

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 堀江秀史

本博士論文「一九六〇年代寺山修司のクロスジャンル論——詩情の源泉と、自己遡及的批評への途」は、表現領域（ジャンル）を問わず縦横に活動した詩人・寺山修司（1935 もしくは 36-1983 年）の 1960 年代に焦点をあてて総体的に論じた、原稿用紙換算で本文千五百枚を超える力作である。

いまだ学術的評価の定まりにくい現代芸術家を扱うに際し、堀江氏はまず周到に研究者としての自分の立ち位置を固めた。それは多ジャンルにわたる寺山修司の全作品の完全書誌を作成しようとする書誌学的立場と、（それとは一見すると正反対とも思えるような）寺山作品を貫く原理を見いだそうとする詩学的立場である。本論文で扱われるのは、俳句、短歌、詩、評論、写真、映画、ラジオ、テレビなど実に多くのジャンルにわたっており、比較芸術論としても独自の達成をみている。現代詩人とはいえ、四十七歳で早逝した寺山修司の作品は、すでに多くの愛好者と高い評価を得ているが、いわゆる学術的考察の対象となったのは近年にすぎない。特に初期の短歌研究と 1970 年代以降の演劇活動についての研究はかなり進んできたが、本論はこれまで不問に付されてきた 1960 年代（1950 年代終わりから 1967 年の劇団結成まで）を中心に扱い、その年代に一気に花開いたクロスジャンルの活動の実態と意味を、総体的に明らかにし得たと言える。

本論文は、全四部、十章（および序章、終章）から構成されており、他に図版、完成間近の完全書誌を含む大部な資料集を付帯している。

第 I 部「詩情の源泉——人物・ダイアログ・〈私〉」（第一-二章）は、先行研究を総括しながら、本論文における一貫した分析の手立てとしての「ダイアログ」および「〈私〉」論を詳細に論ずるものである。第一章「生きられた時間の記述」では、元来寺山自身が自分という存在を語るにあたって虚構と事実との境界を溶解させるという事態を重視し、彼の評伝をそもそもいかに書くかについての考察から始まる。これは寺山の創作世界を「記述」する際に、必ず生じる困難を乗り越えるための原理論とも言える。

第二章「主題と素材の力学」では、年代を限らず寺山作品を分析する際に極めて有効と筆者が考える「ダイアログ」と「〈私〉」という二つの主題を提示している。寺山は生涯一貫して、その二つの主題を問題にしており、それらを展開するための制作方法が深まったことで、ジャンル越境が生じた、という見解である。寺山のダイアログとは、「自分のところを、あらゆる手段を駆使して、その場に即すように伝えること。かつ、伝えることによって、自らに变革をもたらすこと。（この衝突の産物として、作品が創出される。）」（丸括弧内原文）と定義する。これがいかに深い作品分析をもたらす定義であるかは、本論のこのあとに続く章の数々で、立証されることになる。第二章後半では、寺山のテーマとしてすでに有名な〈私〉論を、従来の議論を紹介しつつ時系列にまとめ、先行研究と同様にその起点を、「チェーホフ祭」歌群の模倣事件とその弁明に置いた。以降、「私は遍在する」という「確信」に至るまでの動きを、「身体」「記憶」などのテーマに即して記述している。

そしてダイアログと〈私〉論が一つに重なって提示されたとき、そこに自己遡及的批評という方法が生まれると、堀江氏はさらに主張する。それは、ある表現手段を使って創作をしながら、その表現を解体する方向へ表現を用いるような作品の在り方である。様々なジャンルの表現者たちと積極的に交わり、質問を投げかけ関係を持つこと、考えさせること、それによって自分を変えるきっかけを得ること、その質問を自らに浴びせることで自己の刷新をも図ること。自己遡及的批評とはそのようなものであり、本博士論文は、これらの操作概念を縦横に用いて、以下、多ジャンルの作品の分析に向かうのである。

第 II 部「ダイアログの時代と世代——映像をめぐる比較作家論」（第三-五章）は、寺山が、新

しいジャンルでの制作にいかにか踏み込み、多くの表現者たちと関わっていったかを論ずる。第三章で先に、従来の「映画史」や「写真史」に寺山を組み込めなかった理由を探った上で、第四章では写真、そして第五章では映画を扱っていく。第四章「精神の乱れ交わる街——写真と言語、中平卓馬、森山大道」では、寺山がこの二人の写真家といかにか出会い、他にも荒木経惟や篠山紀信などとの関係性も持ちながら、いかにか共作し、競合しながらも互いに別の道に分かれていったかを極めてヴィヴィッドに描き出している。知られるべき写真史の一頁が長らく置き去りにされていた中で、その現場を「ダイアログ」という鍵概念を軸に描き出した功績は大きい。第五章「オマージュとしてのダイアログ——映画と映画、『少年時代』から『田園に死す』へ」では、比較文学の影響受容理論から「オマージュ」という概念をさらに精練し、映画監督・篠田正浩との関係性を問い直す。

第Ⅲ部「ジャンル特性の測定と適及的活用——NHKアーカイブス資料を中心に」（第六-八章）は、2010年から2014年にかけて堀江氏が「NHKアーカイブス学術利用トライアル」第1回採用人者として従事した研究の成果を基盤としている。ここではさらなるジャンルとして、ラジオ、テレビが取り上げられる。第六章では、ラジオ番組を総合的に検討し、寺山がそのメディアに、「魔力的親密さ」を嗅ぎとり、逆に利用したさまを描く。第七章では、テレビ番組がいかにか人文学研究に資するかという問題を、寺山が出演した作品その他を詳細に調査し論ずる。第八章は、現存する最古の寺山脚本のテレビドラマ『一匹』の作品論である。ここで寺山は、ドラマとは違う結末を、雑誌発表の際に提示した。そこに顕れた寺山のメディア観や、映像と言語の差異などの問題について考察する。第Ⅲ部を通じて確認されるのは、ラジオの魔力的モノログ性であり、メディアの形式や表現の手段から逆算して、それに即した詩情を提示しようとする寺山の戦略である。

第Ⅳ部「詩情と自己適及的批評」（第九-十章）は、寺山の頂点を成す70年代の二つの傑作、映画『田園に死す』（第九章）と写真集『大神家の人々』（第十章）についての作品論である。前者では、短歌と映像の関係を考え、そこに〈私〉論がいかにか強固に根を張っているかを検討する。後者では、写真ジャンルに写真家として参画した寺山が、自らの問題意識を全投入したコラージュ作品《母地獄》を論ずる。映画にも写真作品にも、圧倒的な詩情によって裏打ちされた、極めて理性的な寺山の批評精神があった。堀江氏はそれを、最後のこの二章において十全に論じている。

なお本博士論文にはその付帯資料として、図版や参考文献の他に、「寺山修司完全書誌」が提出されている。長年の調査と厳密な方法論的考察に基づいた書誌であり、文字資料と視聴覚資料のすべてにわたっていることが高く評価され、近い将来の完成が切望される。またいまだに「全集」が刊行されていない寺山修司という制作家の仕事を、後世にどのように伝えていくかという私たちの世代に課せられた問題と真摯に向き合うための、一級の資料になろう。

審査会では先ず一致して、寺山修司という名うての書き手について研究、論述するにふさわしい堀江氏自身の筆力が高く評価された。大部な博士論文を破綻無く書き抜く力と書誌完成への努力も、賞賛にふさわしい。自伝記述論を繊細に展開した第1章、篠田正浩映画とオマージュ論を論じ切った第5章、濃密な作品論である第9、第10章はとりわけ高い評価を得た。一方で自分が使うテクニカルタームを博論全体の中でさらに有機的に連関させる必要性、また1960年代としてのさらなる熟成のためには、寺山作品の間テキスト性への徹底的な目配りが必要であることも複数の審査委員から指摘があった。しかしこれらの指摘は、あくまでも今後の研究の進展と論文公表の際のさらなる希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものでは全くないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。